様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２０日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７～２０１０
課題番号：１９５３０４７１
研究課題名（和文）自然環境を媒介とした共同性構築過程に関する研究
―人と自然の関係誌を読み解く―
研究課題名（英文） The Study for Constructual Process of Communality with Nature: Understanding the Human-Nature Relation

研究代表者
関礼子（ＳＥＫＩ　ＲＥＩＫＯ）
立教大学・社会学部・教授
研究者番号：８０３０１０１８

研究成果の概要（和文）：本研究は、自然環境が地域のなかで共同性を帯びた存在になるという視点から、自然の利用と保全、自然環境保全をめぐる諸制度、公害・汚染問題の「伝承」に関し、共同性と公共性の関連性ならびに拮抗作用について明らかにした。さらに、自然環境の保護は、近代において、「観光のまなざし」と双子で誕生してきたという歴史を紐解きながら、共同性を軸にした自然環境保全の現在的位相を考察した。

研究成果の概要（英文）： From the viewpoint that the nature will always be closely intertwined with the local community, this research clarifies the antagonism and correlation of the communality and public aspects concerning the usage and conservation of nature as well as the various systems governing these areas and the continued transmission of pollution and environmental problems. Furthermore, while I examined the axis of the present phase of nature conservation as the communality, looking at history shows that contemporary ideas about environmental conservation originated with “tourist gaze”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	800,000	240,000	1,040,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード:（1）負の記憶　（2）世界遺産　（3）物語　（4）共同性　（5）自然環境［の保全／行政］　（6）フィールドミュージアム　（7）観光［資源］

１．研究開始当初の背景

（1）自然環境が持つ共同性への着目

人と自然との関係は、自然を媒介とした人と人との関係でもあり、そのため自然環境は共同性を帯びたものになる。このような視点から、自然の利用と保全、自然環境保全をめぐる諸制度、汚染がもたらした過去の諸問題

の伝承から、自然が持つ共同性と公共性との相互連関を考察しようというのが本研究の狙いであった。

（２）多様な公共性の発露への着目
　自然環境のなかに見いだされる公共性は、地域特性を捨象した空虚なものではないし、どの時代、どこにおいても同質なものではない。また、その生成の在り方もさまざまである。環境自治の重要性とその達成が結果として公共性の実現になるということもあるし、一定地域の人々が利用しながら保全してきた自然が公共性の冠をかぶせられるようになることもある。ここで問題になるのは、地域において自然環境が共同性を帯びた性格を有しているのに対し、より抽象的なレベルで自然環境が議論されるときには公共性と共同性との間にズレや乖離が生じ、ときに公共性が共同性を打ち消すような作用をもたらすことさえあるという点である。

（３）公共性が持つ排除作用への着目
　しかし、自然環境の持つ公共性の内実を子細にみていくと、そこには人と自然との関係誌が埋め込まれていることがわかる。実態として存在していたコモンズとしての自然である。だが、自然環境が法や制度によって社会的に保護・保全すべき対象になるなかで、自然環境と密接に結びついていた人々が、当該の自然環境から排除されるような状況もみられるようになった。

（４）共同性と公共性について
　このような状況を省察し、自然の共同性と公共性の相互連関を改めて考察するというのが、本研究の着想の背景であった。

２．研究の目的

（１）共同性を担保した公共性の構築過程
　本研究は、ともすれば排除されがちな人々が自然利用の正当性を獲得し、自然保護の深層を支える主体として、新たな共同性や共同性に基づく公共性を再構築していく過程を明らかにしようとするものである。

（２）共同性と公共性との齟齬を埋める
　自然環境保護のための制度は、地域から組み立てた共同性を担保したかたちでの公共性を守るためにではなく、共同性に齟齬をもたらすかたちで公共性が上から下りてくると感じられるものがある。本研究では、そうした状況に対し、共同性に基づく保護の取り組みや政策が生まれていく状況を実証研究から明らかにし、共同性と公共性とが連動するような政策形成を可能にする要因や前提条件を考える。

（３）「負の記憶」の伝承形態
　自然環境にかかわる「負の記憶」を伝承する民俗行事に対し、共同体の変容はいかなる影響をもたらしてきたか、公害問題や環境問題への世論が与えた影響はいかなるものかを考察する。伝統的な民俗行事の行方ははかないことが多いが、他方で伝統的なかたちを踏襲しつつも、新しく生まれてくる民俗的な行事もある。地域のなかで先細りする「負の記憶」の伝承形態と、それをまねつつ別の地域で生まれる「負の記憶」の伝承形態の連続と不連続について考察する。

３．研究の方法

　本研究は、現前する自然環境や地域社会の空間的・時間的変容、それに伴う人と自然、人と人との関係性の変化に着目するものであった。また、現在の関係性がどのような状況のなかで展開され、どのような問題を孕んでいるかを明らかにすることを目的とした。そのため、次のような調査方法をとった。

（１）主として、史料・文献精読、現地におけるフィールド調査（ヒアリング調査を含む）によって調査研究をすすめた。

（２）それぞれの調査結果は、調査現地にフィードバックしながら深化させた。

（３）また、ヒアリング調査のなかで語られたが、既に記憶の外にあるような地域の子細な事柄・人物に関しては、文献や追加調査（消息調査）によって明らかにし、地域の民俗誌に付与しうる新たな情報として還元した。

４．研究成果

（1）地域からいかに自然環境の公共性を組み立てていくかという問いをめぐっては、自然保護との矛盾を抱えつつ再構成される共同性の事例研究を行った。その成果が、学会でのシンポジウム招待報告（関礼子、自然環境保全からみた漁村の多面的機能、地域漁業学会、2008 年 11 月、広島大学）、および論文「自然環境保全からみた漁村の多面的機能」（『地域漁業研究』2009 年）である。
　ここでは、北海道のえりも町を事例に、①地域の自然環境を良好に保つための国有林地の治山事業が住民雇用の「市民型公共事業」の形態をとったことで、自然環境保全型の地域づくりが活性化したことを明らかにした。また、②地域環境再生が漁村の多面的機能を十全に機能させたこと、③漁村の多面的機能として、事例地では特に自然景観、環境教育、観光資源としての優位性があり、漁業の持続可能性と自然環境の保全とがリン

クしていることを示した。④また、そこで共有された環境再生の営みの「物語」が、野生生物の獣害被害を地域内部で受け止める姿勢に関連していることについて明らかにした。

本研究に関連して得られた知見をもとに、えりも岬の岩礁地帯の微小地名を着目した「『生きられる民俗』としての微小地名」を、事例地における博物館の研究雑誌である『えりも研究』に寄稿し、研究成果の地域還元とした。また、微小地名が過去から現在に至る自然と人間とのかかわりを示す「しるし」という意味を越えて、新たに野生生物との「共存」というテーゼを共有するための指標になる可能性について、関礼子「海を名づけること―微小地名にみる沿岸資源の利用と野生生物との『共生』」で明らかにした。

（２）共同主観的ないし社会的に形成される自然環境評価軸を念頭においた自然環境の保護・保全の可能性について、帯広市における防風林の保全を事例に明らかにした（「半栽培の『物語』―野生と栽培の『あいだ』にある防風林」、2009 年）。ここでは、地域景観にとっても、都市緑地と山地とを結ぶ「緑の回廊」としても重要性を持っている防風林について考察し、①防風林が歴史的に果たしてきた機能や、地域らしさを構成する要素になっていく過程、農業にとっての「在地リスク管理」（菅豊）であると同時に、人生をアイデンティファイするものとしての防風林の側面を明らかにした。②防風林の保全のために、条例で私有林に自然環境保全地区の網掛けをしていく施策を取り上げ、共同性と公共性とを繋ぐ回路がいかに開けるかを考察した。③また、共同性構築過程のダイナミズムを「物語」という概念を用いて明らかにした。

さらに、帯広市によって自然環境保全地区に指定された防風林の所有者へのヒアリングから、農業地域における共同性と行政との距離の近さが、所有の絶対性を相対化する要因になっていることが指摘できる。この点をふまえながら、保全地区指定された防風林所有者の聞き書きを進めており、聞き書きの内容は調査協力者にフィードバックした。

（３）「負の記憶」の伝承形態について、地域の民俗行事や民俗宗教的な側面から考察した（関礼子他『環境の社会学』、2009 年、関礼子「阿賀野川における『負の記憶』の履歴化と『もやい直し』」科学技術社会論学会口頭報告、2007 年）。地域の人々の身近な自然環境は、一般的・抽象的に捉えられる自然環境とは異なっており、身近な自然環境の危機に対する記憶の仕方も、地域において歴史的・空間的に共有される「かたち」を持っている。足尾鉱毒事件では田中正造を偲ぶ念仏が綿々と続けられてきたが途中で寸断し、その念仏を移入した地域で持続的におこなわれている。記憶を残す念仏というかたちは、担い手の高齢化や些細な原因で途切れることがあり、記憶の伝承に対する地域の意志が重要なものになる。そこにおいて、外部からの評価は伝承し続けるための推進力になることを期待しうるが、実際はそうなっていない状況もあることがわかった。

また、新潟水俣病と水俣病、足尾鉱毒事件の地で建立された地蔵を「祈りのネットワーク」と捉え、民俗宗教的な側面を持つ地蔵の意味について考察した。宗教的な畏怖や身体的所作を誘引する強い力が「負の記憶」の伝承に作用する側面、逆に学校教育においては宗教性の扱いに工夫を要し、モニュメント的な意味合いを付与する状況にあるという点についても考察を進めた。

なお、これらについては、新潟市の市民講座などや、新潟県の新潟水俣病の諸委員としての発言・提言などを通して社会還元した。

（４）「負の記憶」の現在的な伝承の在り方として重要視されているのが、環境教育である。現場に身を浸して、「負の記憶」のリアリティを獲得することが持つ意味について、地域の視点から考察したのが、関礼子、「自然を豊かに、地域を元気にするツーリズム」、2008 年、関礼子「感性で物語る環境」2008 年などである。

ここでは、新潟水俣病が発生した阿賀野川のフィールドミュージアム事業などを事例に、①環境教育フィールドとしての可能性を導き出すことと、地域のなかで潜在する水俣病患者が声を出しやすい環境を形成していくこととの相互連関について考察するとともに、②「負の記憶」伝承にあたっての地方自治体（首長）の役割について明らかにした。③また、新潟水俣病など「負の記憶」を画一的に語るのではなく、多様な「物語」を生み出すプロセスが地域社会の共同性の再構築に重要であることを論じた。

また、地方自治レベルでの記憶の共有を地方自治という観点から考察した論文、関礼子、「「政治解決」以降の新潟水俣病―地方自治体の当事者化と流域自治の模索―」を東海社会学会の学会誌に寄稿した（刊行待ち）。

（５）経験された事柄を定型的な枠組みで捉えた際の「負の記憶」が持つ凍結作用についても考察した。「世界遺産」もそうであるが、時代拘束的な視点のなかで形成された枠組みとして記憶や事物を論じると、常なる現在に生けるリアリティから枠組みが離れていくという弊害もある。

関礼子、「海を名づけること―微小地名にみる沿岸資源の利用と野生生物との『共生』」

2011 年、関礼子「感性を磨くツアー」、2010 年、関礼子、「環境社会学『理論』への実践的批判」学会報告、2007 年などでは、記憶の保存と地域の共同性の軸となる記憶の動的側面について論じた。関礼子、「マイナスを逆転させる環境自治の『物語』」2007 年の学会報告では、地域性と具体性を捨象する記憶化と、個人的ないし集合的な記憶化との間の緊張関係を紐解き、当該地域における記憶化の試みを自治という観点から論じた。

なお、この視点を展開した、関礼子、「流域社会の『自治』をデザインする―“絆”をつなぐフィールドミュージアムの来歴」(『感性のフィールド』東信堂、初校終了）が刊行される予定になっている。

（6）人と自然の関係誌という点では、帯広市の防風林所有者の聞き書き集をとりまとめて公開する予定をしていたが、震災の影響で現地での追加調査の機会を逸してしまったが、2011 年中に刊行する予定である。新潟水俣病の被害者のライフ・ヒストリーについても原稿は完成し、ご遺族の方々に公表の可否について確認する段階になっている。マイナーサブシステンスの歴史と現在に関し、サンショウウオ漁を中心に、「新しい伝統」や伝統の現在性、国有林利用の変化による人と山との関係の変遷や観光の推進による生業形態の変化などを考察した「檜枝岐のサンショウウオ漁」が、2011 年度中に刊行されることになっている。このテーマは、学会ではないが、公開形式の研究会にて口頭報告をした。

（7）自然の遺産化の功罪に関しては、自然環境保全の文脈のみならず、広く持続可能な環境と観光という文脈を歴史的に辿りつつ、①観光のまなざしが自然環境を保護の対象としてきたが、観光のまなざしが向けられていた海浜が開発によって失われ、新たに山地に観光のまなざしを形成するために行われた観光開発が自然環境を破壊するようになった状況、②伝統的な生業や暮らしが観光の推進によって変化すると同時に保護されていく過程、③近代に生まれてきた旅行や観光の教育機能が、「負の記憶」を伝承するための環境学習にとって、地域振興の期待とともに着目されている状況について考察した。関礼子、「自然環境保全からみた漁村の多面的機能」2009 年、関礼子「環境を守る／創るたたかい」2009 年、関礼子「感性を磨くツアー」2010 年などにこうした点を示した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

① 関礼子、海を名づけること―微小地名にみる沿岸資源の利用と野生生物との「共生」、海洋環境保全の人類学（国立民族学博物館調査報告）査読無、No.97 別冊、2011、pp.49-71。
② 関礼子、感性を羅針盤にして―いま、ここから見いだしていく希望、感性工学、査読有、Vol.10,No.1、2010、pp.42-44。
③ 関礼子、感性を磨くツアー、感性哲学、査読有、No.10,2010、pp.42-55。
④ 関礼子、環境、その身体性と地域性のリアリティ―『環境の社会学』に寄せて、書斎の窓、査読無、No.594、2010、pp.48-51。
⑤ 関礼子、自然環境保全からみた漁村の多面的機能、地域漁業研究、査読有、No.49,Vol3、2009、pp.91－106。
⑥ 関礼子、「生きられる民俗」としての微小地名、えりも研究、査読無、No.6、2009、pp.3-8。
⑦ 関礼子、自然を豊かに、地域を元気にするツーリズム、生物科学、査読無、Vol.60,No.1、2008、pp.41-43。
⑧
⑨ 関礼子、感性で物語る環境、感性哲学、査読有、No.8、2008、pp.45-58。

〔学会発表〕（計６件）

① 関礼子、新潟水俣病問題―善意と社会正義の舞台裏から、日本マスコミュニケーション学会ジャーナリズム研究部会１５回研究会 2011 年 3 月 9 日、慶応大学。
② 関礼子、「政治解決」以降の水俣病問題―問題の原点に立ちかえる地方自治の可能性、東海社会学会、2010 年 7 月 3 日、金城学院大学。
③ 関礼子、自然環境保全からみた漁村の多面的機能、地域漁業学会、2008 年 11 月 9 日、広島大学。
④ 関礼子、環境社会学「理論」への実践的批判、環境社会学会、2007 年 12 月 8 日、龍谷大学。
⑤ 関礼子、「阿賀野川における『負の記憶』の履歴化と『もやい直し』」科学技術社会論学会（ワークショップ「ローカル知の組織化と地域社会のデザイン」)、2007 年 11 月 11 日、東京工業大学。
⑥ 関礼子、マイナスを逆転させる環境自治の「物語」、感性工学会感性哲学部会、2007 年 3 月 7 日、宮城大学。

〔図書〕（計４件）

① 関礼子・中澤秀雄・丸山康司・田中求『環境の社会学』有斐閣、2009、pp.1－270。
② 関礼子、「つながり、かかわる環境運動」、高校生のための社会学編集委員会『高校生のための社会学―未知なる日常への冒

険』ミネルヴァ書房、2009、pp.86-95。
③ 関礼子、「半栽培の『物語』―野生と栽培の『あいだ』にある防風林」宮内泰介編『半栽培の環境社会学―これからの人と自然』昭和堂、2009、pp.180-200。
④ 関礼子「環境を守る／創るたたかい」鳥越皓之・帯谷博明編『よくわかる環境社会学』ミネルヴァ書房 2009、pp.98-101。

〔その他〕
ホームページ等
Homepage3.nifty.com/yukidon/seki.html

６．研究組織
(1)研究代表者
関礼子（SEKI REIKO）
立教大学・社会学部・教授
研究者番号：８０３０１０１８

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし